られける、○略中今二には、おほんくしのてうど、すへひたひよりはじめ、さいし、もとゆい、おほんくしどもなど、そのくさともいはずめでたてゝ、たかつきなんまうけ給へりけり、

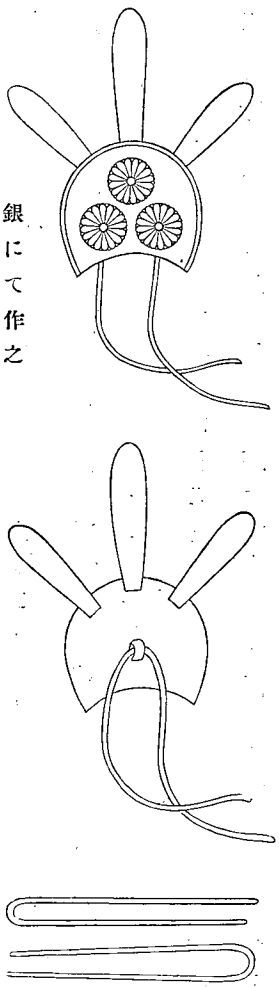
〔安齋隨筆二十九〕釵子　是は宮女の髻の飾なり、字音サイシなり、今世の詞にオシャシと云ふは即ち御釵子なり、サイシの轉語なり、玉篇に釵は婦人岐笄也とあり、○略中貞丈云く、女房式正の時は、垂髮して頂の上に髮を瘤の如く束ねて、是をカブと名づく、其のカブに釵子をさすなり、別に圖あり、如斯するを髮あげと云ふ、

釵子用法

〔歴世女裝考二〕さいしといふ髮のかざり

さて此さいしといふ首飾、文字には釵子とありて、むかしより和訓のなき物なり、此さいしは七八百年の中昔の比及よりや、女の髮のかざりとなしけん、新撰字鏡にも、和名抄にも釵子といふ物みへず、後の物には、さいしとのみ名はみへたれど、形狀は考られず、雅亮裝束抄には、五節の舞の下仕の女に、さいしを著てやる仕方を委くかきたる文をみれば、紐ありて髮に結びつける物也、然るに東山殿比の記錄女房飾抄に寫本圖あり、

釵子の圖さいしをよみくせにて、かいし、おさやしともいふよし、



銀にて作之

二本一對さいしにそふる物なり、銀にて作る、

右のさいしを髮にかざるには、垂髮のつむりのまん中へ小枕をいれて、瘤だつ物をこしらへ、これにさいしを結びつけるなり、結びやうは雅亮裝束抄に五せちの所くはしくみへたり、髮の毛を瘤